

第215回 「元気に百歳」クラブ「道草」開催

今年も早や11月中旬に入りました。このところ気にしていた新型コロナウイルスの感染拡大、第8波の到来が、いよいよ現実性を増してきました。政府は5回目のワクチン注射では、オミクロン対応のワクチン注射を準備し、万全を期しています。小生も12月の早い時期に済ませます。皆さんはもう済ませられましたでしょうか。

さて今月の句会ですが、前月同様、句会に参加する人は、投句から選句までをPCインターネットで済ませ、対面して行う所謂リアル句会では、自身の選句結果を発表することから始めています。リアル句会に欠席する人は、優秀句の選句と、その中から最優秀句一句、私たちが天賞と呼んでいるものですが、この天賞の選定と、天賞に推挙したコメントを記述してもらいます。そしてこれを、まとめを担当して下さる方（11月は、本間傘吉さん、12月は森田多佳さん、お二人が交代しながら務めて下さっています。傘吉さん、多佳さん、お世話になっています）に送信する・・・という形で進行します。今月はリアル句会に出席した人は9名、欠席した人は8名、総員17名の句会となりました。17名の皆さんのお名前は下述の通りです。

芦川創風さん、板倉歌多音さん、井上蒼樹さん、太田一光さん、奥田和感さん、金田月草さん、君塚明峰さん、木村栄女さん、高瀬荻女さん、辻柴楽さん、手嶋錦流さん、中島憧岳さん、原晶如さん、船戸清助さん、本間傘吉さん、森田多佳さん、芦尾白然（17名）。

元より私たち「道草」は、有季定型の伝統俳句を学んでいる集団です。従いまして詠む俳句は、「文語体」で表示してきていますが、必ずしも守られてきたとは言えませんでした（まだ完全とは言えません）。それが今月は「文語体」を意識した句が圧倒的に増えてきたと言えます。これは良いことではないでしょうか。

もう一つ、前月から最多得票賞の「☆印」に対して、獲得票を「㊦印」で表示することにしました。そして今月は更に、最多得票ではありませんが、次点の得票句を「㊦印」と共に表示することにしました。ご高覧下さい。

兼題1「都鳥」又は「百合鷗」

◎『江戸竿のしなり手にあり都鳥』	栄女	天3☆9
◎『可惜夜の舳ふ楼船都鳥』	清助	天2㊦4
◎『船溜まり群れてゆらゆら百合鷗』	傘吉	㊦7
◎『こと問ふも返しはあらず百合鷗』	白然	㊦7
◎『都鳥散らし隅田の屋形舟』	明峰	㊦6

兼題2「鯛焼」

◎『鯛焼が湯気だし街を泳いでる』	錦流	天1㊦4
◎『鯛焼の紙に老舗の紋どころ』	栄女	☆7
◎『鯛焼きや餡の熱さと茶の旨さ』	白然	☆7
◎『鯛焼をわかち合ひして老夫婦』	多佳	㊦5

兼題3「当季雑詠=冬=」

◎『からころと早る落ち葉に追ひ越され』	月草	天4㊦7
◎『網棚に熊手逸れて終電車』	傘吉	天2☆11
◎『冬くれば冬の姿や富士の山』	白然	天2㊦2
◎『明け暮れの雨戸にひそむ冬の声』	明峰	天1㊦7
◎『駅ピアノ白杖少女冬薔薇』	荻女	天1㊦5
◎『人まばら桜紅葉の目黒川』	一光	天1㊦2

兼題1では、栄女さんの句「江戸竿のしなり手にあり都鳥」が、天賞三つと最多得票賞（☆印）を獲得しました。自慢の江戸竿を駆使しての魚釣りの景、今、魚がかかった手ごたえを感じている景が脳裏に浮かんできました。そして「我閑せず」の都鳥が波間に浮かぶ……。見事な一瞬を切り取られました。

次に清助さんの句「可惜夜の舳ふ楼船都鳥」が、天賞二つを獲得しました。上五に使われた「可惜夜」という新しい熟語が出てきました。「名残惜しく明けないで欲しい夜」という意味も持ち、中七にある「楼船」には料理屋、遊女屋の意があります。繋がれた楼船の夜明けの景でしょうか。艶めかしい句になりました。

次に傘吉さんの句「船溜まり群れてゆらゆら百合鷗」が、選外ではありますが、高得票の句でしたのでご披露します。この句を声を出して読んでみると判りますが、「ゆ」が効果的なリズムを生んでいます。「ゆらゆら百合鷗」……。好いですね。次に白然の句「こと問ふも返しはあらず百合鷗」も、選外でしたが高得票句でした。伊勢物語で東下りの昔男が詠んだ歌「名にし負はばいざ言問はん都鳥わが思ふ人はありやなしやと」を振った句です。「問はれても百合鷗の現世、返しなどはありませんよ」の意を表したつもりです。もう一句、明峰さんの句「都鳥散らし隅田の屋形舟」も高得票を獲得しました。屋形舟に散らされた都鳥が見えてくるようですね。

兼題2では、錦流さんの句「鯛焼が湯気だし街を泳いでる」が、天賞一つを獲得しました。この句は口語体の句になりましたが、鯛焼の鯛が湯気を出して街を泳ぐという発想が、嘗て子門真人が唄って流行した歌「およげ！たいやきくん」が、思い起こされます。次に天賞は付きませんでした。栄女さんの句「鯛焼の紙に老舗の紋どころ」が、最多得票賞（☆印）を獲得しました。これはまさしく鯛焼を包装した紙についての句ですが、にっこりと笑いを浮かべる句になっています。リアル句会では、中七の冒頭「紙に……」とありますが、ここは「紙は」の方が物語が広がるとの意見が出ました。如何でしょうか。白然の句「鯛焼きや餡の熱さと茶の旨さ」も、最多得票賞（☆印）をいただきました。ちょうどNHKの俳句番組でも兼題「鯛焼」が捉えられていて、「鯛焼の美味しさが表現出来れば上々」と言われていました。いただいた「ひと口」のコメントに「美味しそうですね」との感想があり、嬉しくなりました。選外句でしたが、多佳さんの句「鯛焼をわかち合ひして老夫婦」が、高得票を獲得しました。何事も、何でも分かち合う老夫婦の日ごろの暮らし、この句には平和な長閑な暮らしの雰囲気が漂います。

席題3では、月草さんの句「からころと早る落ち葉に追ひ越され」が、天賞四つを獲得しました。この句の中七「早る落ち葉」に、作者は「焦る」「急ぐ」の意を込めているように思われます。そして自分は追いついていく落ち葉を見ているだけ……。というシーンです。これから進む老いと冬の寒さを迎える侘しさを思います。

次に傘吉さんの句「網棚に熊手逸れて終電車」が、天賞二つと最多得票賞（☆印）を獲得しました。獲得された11票は、記録的な高得票です。この句は「西の市」という言葉を使わず、「西の市」で起こした「しくじり」を見事に表現しました。しかも中七で「逸れて」というフレーズを使い、そのしくじりをユーモラスにしています。きっとお酒でも飲んだ上での失敗談ではないでしょうか。何だか温かさも感じます。次に白然の句「冬くれば冬の姿や富士の山」が、天賞二つを獲得しました。遙か遠くに見える四季折々の富士の姿、中でも冬の富士は白く輝き、美しい分だけ厳しく思われます。

次に明峰さんの句「明け暮れの雨戸にひそむ冬の声」が、天賞一つを獲得しました。毎日、朝な夕なに閉める雨戸、この雨戸から感じられる冬の気配を、明峰さんは「雨戸にひそむ」と表現されました。そしてこれを下五で「冬の声」とされましたが、「冬の声」では季語として不十分ではないかと……。これは判りません。今後のためにも正解を追及

しましょう。句としては中七の「雨戸にひそむ」が好いですね。次に荻女さんの句「駅ピアノ白杖少女冬薔薇」が、天賞一つを獲得しました。この句は、所謂「三段切れ」の句です。ですが読者は、駅ピアノで駅構内の広場に設置されている、誰が弾いても構わないピアノを思い、そこに白杖の少女がピアノを弾きに来た。そして奏でる曲は素晴らしく、そこに冬薔薇の美しさが醸し出された・・・と解釈もできるし、ピアノの上に冬薔薇の花瓶が置かれていたとも表現できる。次々と物語を連想させる句です。

もう一句、一光さんの句「人まばら桜紅葉の目黒川」が、天賞一つを獲得しました。春のお花見に比べれば、目黒川の人はい少ないかも知れません。冬に向かう目黒川、これからは桜紅葉が映える季節の到来です。この句、上五で「人まばら」と表現されましたが、説明的すぎるのではないかと思いました。例えば上五を「はらはらと」としてみますと、「はらはらと桜紅葉の目黒川」となります。如何でしょうか。初冬の桜紅葉の景になりませんかでしょうか。

もう一句、選外の句ですが、栄女さんの句「紅葉散る峠の茶屋の店仕舞」が高得票を獲得しました。「店仕舞」というシーンは、何時の世も感傷的な時間が流れます。この峠の茶屋にもその感傷が流れたでしょう。好いシーンを切り取られたと思います。

今回も良いリアル句会であったと思います。晶如さんの何気ない感想のように思われるひと言が、適切なアドバイスに繋がっていくというか、考える要素になります。前述した栄女さんの句「鯛焼の紙に老舗の紋どころ」と「鯛焼の紙は老舗の紋どころ」の違いを吟味してみましょう。助詞の「に」と「は」の違いですが、学ぶことが多いと思います。リアル句会の良さは、リアル句会に出席して、感じて欲しいと思います。

12月のスケジュールが、間もなく通知されることと思います。また12月、楽しく俳句を学びましょう。年末です。コロナ禍に巻き込まれることなく、明るく元気にお過ごし下さい。また新橋ばる一んでお会いしましょう。

白然記